

朴齊家と日本美術—朴齊家詠「日本芳埜図屏風歌」を中心に

朴美姫（東京都江戸東京博物館）

江戸時代を通じて計20回の朝鮮通信使を介して朝鮮国王に贈られた161双の屏風は、日本側に筆者や画題の記録が残り、第8回目（1711年）の20双については画題に関する説明が添えられたこともわかっている。このように、多くの屏風が贈られたにもかかわらず、朝鮮側の反応を示す記録は1609年に贈られた「楊貴妃図屏風」程度であったため、それ以外の屏風絵がどのように受容されたか、その実態については不明であった。しかし、同じく洪善杓氏が紹介する第22代朝鮮国王、正祖の信頼を得ていた実学者、朴齊家（1750～1805）の詠じた「日本芳埜図屏風歌」（朴齊家『貞蕙閣集』2集〈韓国・国立中央図書館蔵〉）から、当時の文人が日本の名所風俗図屏風をいかに観察し、どのような関心をもったのかについてある程度判明するのである。

本発表では「日本芳埜図屏風歌」が詠まれた背景とその内容について、まず、対象となる屏風が第8回目（1711年）の贈朝屏風、狩野洞春筆「芳野図屏風」である可能性を視野に入れ、その様相を詩文の内容から推測し、類例を参照して屏風絵の様式と構成を検討する。

次に、この朴齊家の詩文中に、日本の儒者、荻生徂徠（1666～1728）や相国寺の禅僧、大典顕常（1719～1801）の名前が見出されることを指摘し、さらに第11回目（1764年）の通信使がもたらした文物や情報も詠まれていることを明らかにする。とくに大典の名があることは、この詩文が「兼葭雅集之図」（韓国・国立中央博物館）と関連性があることを示唆する。近年、現存が確認され、朴晟希氏が『美術史』182号に紹介した「兼葭雅集之図」は第11回朝鮮通信使の成大中が制作を依頼したもので、木村兼葭堂や大典をはじめとする関西の文人と通信使の随員の朝鮮文人との交流を背景として成立した。

朝鮮へ持ち帰られた後は実学者たちのネットワークを通じて借覧され、特に実学者の中心的な人物であった李徳懋は「天下の宝」、「千古勝絶」と評価し、日本ブームともいえる盛り上げを引き起こした。このような状況は李徳懋と深く関わっていた実学者の仲間である朴齊家にも多大な影響をあたえ、会ったこともない木村兼葭堂、滝鶴台（1709～1773）らを自身の詩文「戯倣王漁洋歳暮懷人」（『貞蕙閣集』初集〈韓国・国立中央図書館蔵〉）にも紹介している。このような状況から、第11回目の朝鮮通信使と関西文人の交流によって共有された日本の文化に関する情報が、後年に詠まれた「日本芳埜図屏風歌」に反映されるようになったと考えられる。

以上のように朴齊家の「日本芳埜図屏風歌」は、朝鮮国王と日本の幕府将軍をむすぶ贈朝屏風に関係すると同時に、同時代の朝鮮文人と日本の書画を介した交流によって興隆した日本への関心ともつながりをもっている。その多面的な受容の実態をかれらの詩文とともに紹介し、日本に関する情報が贈朝屏風を詠んだ朝鮮の文人の詩にまでも反映されるようになった経緯を解明したいと考える。これらの探求は、従来の贈朝屏風研究に、文化的文脈からの考察という新しい可能性をもたらし、その発展を促すものとなるだろう。